

ジンコ、2022年前半モジュール出荷18.2GWで世界首位

日本法人社長 孫威威氏インタビュー

ジンコソーラーは、2022年前半の太陽電池モジュールの出荷量が18.21GWで世界首位となった。脱炭素化に加えてウクライナ情勢によるエネルギー安定供給への不安などから、太陽光発電を始めとした分散型の再生可能エネルギーへ関心とニーズが世界的に強調される中で、同社は最新型の高出力・高効率型太陽電池であるN型Tiger Neoシリーズなどのソリューションで太陽光発電の普及拡大に取り組む。世界や日本での今後の同社の事業計画などについて、ジンコソーラー・ジャパン社長の孫威威氏にお話を伺った。

—今年前半の世界でのモジュール出荷量の業績に対する評価と、通年の出荷計画についてお聞かせください

孫 ジンコソーラーの2022年前半の世界でのモジュール出荷量は18.21GWで世界首位となった。中国や欧州、ラテンアメリカ、アジア、北米といった地域における出荷量が伸びた。そして2022年の通年の世界におけるモジュール出荷量は、35GW～40GWを計画しており、さらに今後は毎年30～35%の出荷量の伸び率を計画している。

—昨今のコロナ禍やウクライナ情勢による貴社の事業への影響は

孫 中国では、3月から6月までの約2カ月半にわたる上海でのロックダウンによる影響があった。一方で、ウクライナ情勢によるエネルギー価格の高騰などもうけて、太陽光発電など再生可能エネルギーに対する需要は今後も伸びる。今年の世界全体での太陽光発電導入量は250GWとなり、昨年より

50GW～100GW導入量が拡大するとともに当社は見込んでいる。

—中国では今夏は電力不足にも見舞われました。こうした事態による事業への影響はありましたか

孫 中国で電力不足の問題が大きかった地域は四川省で、同省に工場を持つが、当社に与える影響は少ない。当社はほかの各省にも分散して工場を構えているほか、各工場では自社のパネルを屋根上に設置して電力の自家消費も行い電力を確保している。さらに既存の各工場の生産能力の拡大にも積極的に投資を行っている。

—日本での2022年前半の出荷量は。また、最新型のN型Tiger Neoシリーズの太陽電池モジュールや、住宅用蓄電システムSUNTUNKの日本における引き合いの状況はいかがですか

孫 日本においては、原材料費の上昇や円安、またFIT価格低減の影響で、2022年前半の出荷量は昨年同期より減った。ただ、具体的な出荷量の数値は差し控えるが、2022年前半の日本での市場シェアは20%を確保した。

日本の投資家は、新たな技術の導入にあたり、とくに長い時間をかけて導入の検討や監査を行う。もっとも、日本でFIT価格の高価な時代は、モジュールの品質よりも、高価な売電価格をいち早く確保・確定することが重視されていたが、FIT価格低下も進んだ現在は、モジュールの



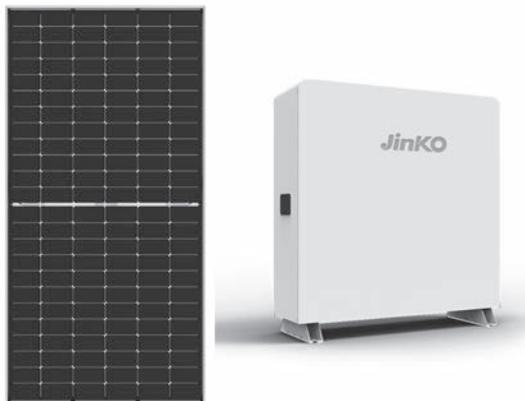
孫威威氏
(ジンコソーラーより写真提供)

発電量が事業者の収益性に直結する。そして発電量はモジュールの品質に左右されるもので、ジンコソーラーの高品質のN型Tiger Neoモジュールが、日本において力を発揮することになる。またSUNTUNKは、今年末までに電気安全環境研究所(JET)の系統連系保護装置等認証の取得を目指しており、2023年からより本格的に販売を行っていく。さらに日本では50kWh、100kWh、200kWhのより大型の蓄電池も展開を計画している。

なお今夏にジンコソーラーは「1+2+3+N」分散型全シーンソリューションの戦略・スローガンも新たに公表した。このうち1は太陽電池、2は蓄電池、3はソリューション、NはN型Tiger Neoシリーズをそれぞれ指している。

—今回来日された一番の目的は

孫 コロナ禍で私も2年半は日本に来れなかったが、お客様との会合も行い、日本の最近のマーケットの変化などについて自身で感覚的にも確認をしたいと思い、来日を決めた。



N型Tiger Neoモジュールと住宅用蓄電システムSUNTUNK
(ジンコソーラーより製品画像提供)